

第12回

博報教育フォーラム

レポート Hakuho Education Forum Report 2015



～体験から思考・表現へ。自分をつくる学びとは。～



博報教育フォーラムは

優れた教育実践のエッセンスを体感できる場を提供します。

優れた教育実践には、広く他の教育現場で新たな価値を生み出すためのエッセンスが含まれています。このフォーラムは、教育の新しい潮流となりうる旬のテーマと優れた教育実践の事例を選び、様々な立場の参加者が共に考えを深めて意見交換をする場を提供することを通して、優れた教育実践を他の実践現場へ拡大・波及させることを目的としています。

第12回 博報教育フォーラムプログラム

1 事例発表

「博報賞」受賞者が活動事例を発表します。教育界に風を吹き込んだユニークで優れた実践を、フォーラムのテーマに沿って、別の観点から眺めるとどうなるか？魅力的な教育モデルだけでなく、子どもたちへの教育実践者の熱意が伝わってきます。



2 基調講演

教育界から注目を集める専門家による、テーマを俯瞰した講演です。フォーラムのテーマを学術的視点や実践的視点など広い視点で捉え、テーマの意味や課題の整理、問題提起、解決の糸口の提案などをしていきます。



3 ポスターセッション

事例発表者が特設ブースで活動事例を展示報告します。事例発表、基調講演の後、展示されたポスター、子どもたちの作文、実践カリキュラムやオリジナル教材を手に取りながら、テーマをより深く考え、理解し、実践的なノウハウを吸収する、参加者と発表者、参加者同士のネットワークづくりの場です。



4 パネルディスカッション・グループセッション

事例発表や基調講演で提示された様々な要素を、パネルディスカッションやグループセッションの中で、整理したり、深めたりしながら、参加者一人ひとりがテーマをより主体的に考える場です。パネリストによるクロス討議に会場も巻き込みながら、考えを深め、触発し関連事例の追加提示などしていきます。





第12回博報教育フォーラム

～体験から思考・表現へ。 自分をつくる学びとは。～

子どもが「自分」と出会う道のり、それは子どもの成長そのものといえます。

さまざまな体験から実感し、発見する。自分自身で考える。

人とのふれ合いを通して新しい自分に気づく。

そうした、いろいろな体験から得たものを表現していくために大切なものは何か、
ご参加の皆様とご一緒に考えました。

Case.1

思考や表現の土壌を育む体験を ～「存在することの確かさ」を求めて～

* * *

岐阜県 学校法人西濃学園 西濃学園中学校
スクールカウンセラー 太田 宣子



全寮制で不登校の子どもたちの自立支援を行っている西濃学園。地域の絆と荒々しいほどの自然が残る岐阜県揖斐における生活や地域活動等の体験は、社会参加に必要な、しっかりした「自分」という感覚を育てています。

不便さ・不快な感覚が 研ぎ澄ますもの

西濃学園は、山懷深く抱かれた自然豊かなところにあります。しかし、自然に恵まれているということは、自然の厳しさも享受しなければならないということです。

当初、都市部での設立を勧める声もありましたが、学園長は地域の絆と荒々しいほどの自然が残る土地そのものが持つ教育力、再生力に基軸を置き、この地に設立を望みました。

不便な生活の中で感覚をより刺激されることで、直観的、本能的なところが活性化され、「身体感覚」という生きる力の最も原始的なところが培われると感じます。また、そのような生活だからこそ、子どもたちは「自分たちは守られている」「世話を受けていてありがたい」ことを意識しやすくなります。ここには、依存していることを知らずにいる絶対的な依存の段階から、依存の事実や依存する対象が自分には必要だということを知っていく相対的な依存への移行という、成長過程で必要なプロセスがあります。

西濃学園は基本的に全寮制ですので、生活のすべてを教育的に活かそうと試んでいます。そして実践の中で、生活のリズムの安定がいかに大切であるかを実感しています。毎朝決まった時間に起き、朝食を済ませ、充実した時間を過ごした後に昼食、午後もしっかり学んで、夕食をくつろいでいただく。入浴でさっぱりして、しっかりと就寝。普通のことで、こうした生活のリズムができてくると、体のリズムが生まれ、自己感のもとになる身体性の感覚がしっかりとできてきて、さらに情緒や認知といった精神的な働きもよくなるのです。

共同生活の持つ力は非常に大きいものがあります。嫌なことや面倒なことも、引き受けなければならないことが絶対に出てくるのです。例えば、昨年まで食後の食器洗いは教師と生徒たちが当番制で行っていました。面倒で嫌な作業なはずですが、みんなの役に立つ役割を担えることを、意外なほどやりがいとして楽しんでいました。また、談話室にはテレビがありますが、台数は少なく、譲り合いが必要となるため、公共性につい

て考え、体験的に学ぶことができます。また、洗濯や自室の管理、お金の管理なども教師と学んでいきますが、自分のことを自分でできるようになる、つまり「生活者」として自信を持つという手応えが、子どもたちの自信の土台になると強く感じます。

地域活動や行事で 「自分」と「他者」をつなぐ

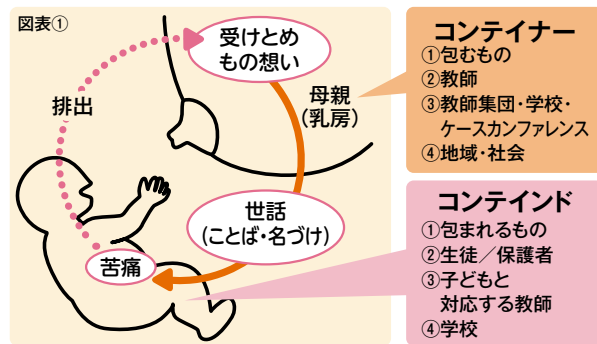
さまざまな年間行事にも取り組んでいます。ここでも子どもたちが「自分」という感覚をしっかりと持てるように、「自分」という身体感覚を培い、さらに他者と共にあって、通じ合える、わかり合える、そんな体の感覚と心の感覚を持てるような取り組みを積極的に行っています。地域のクリーン活動や、マラソン大会のボランティア、また学園の最も大きな行事の1つ、3泊4日の北アルプスの夏山登山は、身体的、精神的に自らの限界に挑む大きな挑戦となる体験です。地域の祭りでは、1つの神輿を皆が担ぎ、掛け声を掛け合い、息を合わせて、自分の役割を果たします。祭りは一体感と自分の存在感を同時に強く感じることで、共同体



一大行事の北アルプス夏山登山

コンテイナー／コンテインドモデルの多層性

参考文献：松木邦裕著、1996年『対象関係論を学ぶークライン派精神分析入門』（岩崎学術出版社）より引用して改変



の営みです。学園祭では、今年は集団的自衛権をテーマにした創作劇を子どもたちの希望で作りました。自分とは無関係に感じている出来事を、自分のこととして引き寄せて考え、取り組んでいくことの難しさ、しかしそのような主体性が必要なのだということを考える機会になりました。

母親と乳児のような関係で向き合っていく

西濃学園の教育活動を支えている理論を紹介します。松木邦裕先生が紹介された、ビオンの母親<=コンテイナー(包むもの)>と乳児<=コンテインド(包まれるもの)>の交流モデル(図表①)を学校のあり方の多層的なイメージとしております。まず、コンテインドを子ども、生徒と考え、コンテイナーを教師と捉えてみます。教師は、子どもが問題や症状によって何を表現しようとしているのかを傍らにいて受け容れながら考え、試行錯誤しながら痛みや悲しみを理解しようとし、理解できたことを子どもに伝えていく、という連続的な世話をします。それを繰り返し、最終的には子ども自らが、自分のこと、周囲の現実をよく知り、自分で考えられるようになることを援助していきます。

しかし、コンテインドの排出する痛みが手に余る形で排出されたり、あ

るいは教師側に問題があったりすると、コンテイナーの機能が不全になってしまいます。そうならないように教師を、コンテイナーとしての教師集団や学校がきちんと抱えるという機能が非常に大切になってきます。そこで、西濃学園では、ケースカンファレンスによって、教師集団が相互援助的に吟味し合い、支援や教師の成長に役立てています。さらに、コンテインドである学校を、コンテイナーとしての地域や社会が見守り、育んでくれています。

希薄な自己の感覚を乗り越えて

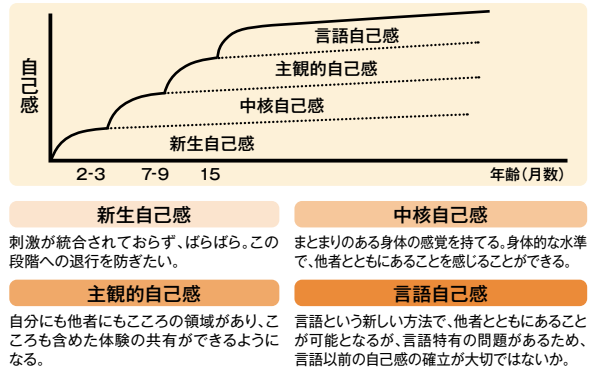
現代の子どもたち、特に不登校の子どもたちは、「自分」という感覚の描けなさが、集団や社会に参加している自分のイメージの描けなさにもつながっているのではないかと感じています。

これは(右下画像)子どもたちが西濃学園に入学したときに、自分を描いた人物画です。身体イメージが貧弱で、生きている実感が薄く、自己の感覚の希薄さがうかがえます。また地面との距離の遠い絵も多く、自己の浮遊感、社会から漂っている感じを受けるかと思えます。手を描かない、描けない子どもも多く、社会や世界に手を出すことのできない無力感やあきらめを感じることも多いのが特徴です。

自己感の発達順序

図表②

参考文献：D.N.スターン著 小此木啓吾・丸田俊彦監訳 神庭靖子・神庭重信訳、1989年『乳児の対人世界 理論編』（岩崎学術出版社）より引用して改変



西濃学園では、子どもたちの社会参加のためには、(スターンの発達理論のように)まずはことば以前の自己感から育て、定着させることが大切であると、中核自己感、主観的自己感を意識した教育活動を行っています(図表②)。中核自己感を育てるのは、何といても自主的な、規則正しい生活が最も手堅いと実感しています。そして、主観的自己感、中核自己感のときに養われた身体感覚を持てるつながりを土台に、情動の共有を得て、間主観性の形成を築いていきます。夏山登山や祭りといった体験の共有は、情緒が他者とつながる、他者と内的体験を共有できるという重要なつなぎの役割を果たし、主観的自己感を育んでくれます。

西濃学園での生活を経て、卒業を控えた子どもたちがどのような成長を遂げたか(下画像)。人間の形を獲得し、足が地に着くようになり、手が描かれるようになり、実際の彼らにとっても似ています。等身大の現実的な実感の伴った自分というものを獲得していったように思われます。(拍手)



入学時の人物画

卒業時の人物画

Case.2

首羅山遺跡学習による 地域を愛する心の育成

* * *

福岡県 久山町立山田小学校・久山町立久原小学校
久原小学校主幹教諭 安部 憲司



地元の貴重な遺跡を、総合的な学習の時間に活用している久山町の山田小学校と久原小学校。本物に触れる豊かな体験を通じて子どもが主体的に学び、発信し、地域とかかわりあうことで、さまざまな活動の広がりを見せています。

本物の体験を通して 主体的な学びをつくる

首羅山遺跡は、福岡県久山町にある、中世の山寺の跡です。平安時代後期から鎌倉時代にかけて僧侶の修験の場となり、最盛期には350もの坊があったと伝えられる、大変貴重な遺跡です。



薩摩塔に触れる子ども

首羅山遺跡のシンボルである薩摩塔に触れた子どもが「わかった!」と叫んでいます(上画像)。「目を閉じて手をかざしてみると、何だか薩摩塔が話しかけてきた」と言っていました。彼は首羅山遺跡の学習を特に楽しみにしており、主体的に問題解決的な学びをしています。このような姿を目指して学習を進めてまいりました。

今回のテーマ、「自分をつくる」とは、学びを通して自分の考え方の基

盤を形成することだと捉えました。そのための「学び」には内容と方法とがあります。内容とは、学習についてまず気づき、考え、そして生き方に反映させる。つまり、内容を自分なりに理解し、自分の中に取り込んでいくこと。方法は、学習内容、情報を得る方法を身につけること、つまり、生涯において自分形成をしていく方法と捉えました。そのような学びをつくるために、総合的な学習の時間において単元「わたしたちの首羅山遺跡」を開発しました。

3つのポイントで 活気ある単元づくり

その学びをつくるには、3つのポイントがあります。

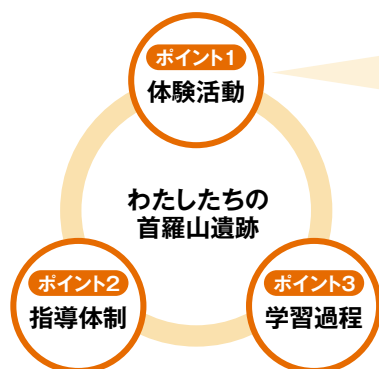
1つ目のポイントは、「豊かな体験活動」です。それには3つの条件があると考えます。まずは五感をゆさぶる「本物の体験」です。本物の遺跡や遺物、さらにそれに触れることができれば、子どもたちは五感を使って大人の想像する以上に思いをめぐらすことでしょう。次に、継続的に楽しむことができる「多様な活動」です。

多様な活動を設定できれば、さまざまな観点から問題解決を試みることができ、単元の価値を高めることができます。最後は、事象を身近に感じることができる「地域の素材」を活用することです。歴史的事象を取り扱う場合は、空間的、時間的な隔たりを感じる歴史を子どもたちにいかに身近に感じさせるかがカギになります。身近に感じる感情はやがて追究したり、発信したりするときのエネルギー源になっていきます。

学びをつくる2つ目のポイントは「指導体制」です。学校だけではできない取り組みも地域との協力によって可能になる場合があります。そこに市町村の教育委員会など行政が入った三位一体の体制をつくることによって、よりダイナミックな取り組みが可能になるといえます。学校も行政も地域も子どもの成長を望むことではベクトルは同じです。学校教育のどこに、どのような切り口で共通点を見出すかが大切であると考えます。それが本校の場合は「首羅山遺跡」だったというわけです。

3つ目のポイントは、「学習過程」です。この単元では、あえて演繹的な学習過程を組んでいます。首羅山遺跡の事象自体は子どもたちが理解することは難しいものであると言えます。そこで、子どもたちが導入の

学びをつくる3つのポイント



ゆたかな体験活動

五感をゆさぶる

本物の体験

ずっとたのしむ

多様な活動

身近に感じる

地域の素材

学びを生む

学習過程の工夫 演繹的な学習過程

段階	学習活動	子どもの意識
導入	首羅山遺跡との出会い	すごい! ↓ 知りたい!
展開	本物の体験 多様な活動 地域の素材	本当だ! ↓ もっと知りたい!
終末	表現活動 ↓ 発信	知らせたい!伝えたい! ↓ 守りたい!受け継ぎたい!

段階で遺跡の価値を捉え、本物体験を通してその価値を証明し、実感していきます。すると、知らせたい、伝えたいという気持ちを持ちます。そのタイミングで表現活動を設定し、^{ふるさと}守りたい、受け継ぎたいという、故郷を愛する心へと高めていくという過程をたどるわけです。発信する活動をきちんと位置付け、重視しているところが特徴です。それにより、子どもたちが故郷への思いを地域や行政に発信することによって、受け取った地域や行政側が、それに応えて、その思いを実現させていくという好循環が生まれてくるわけです。

子どもたちの気持ちを高める実践プロセス

具体的な実践を紹介します。導入の段階では、歴史のものの見方や考え方について触れます。「歴史は新しい」。毎年全国のどこかで新しい発見があり、歴史は塗り替えられます。「歴史は面白い」。どんな人でも追究すると新しい発見が得られます。そして、「歴史はありがたい」。消滅した遺跡もある中で、首羅山遺跡は現存し、私たちに何かを伝えようとしています。さらに、「歴史はすばらしい」。私たちがこの遺跡を大切にに取り上げ、守ってきたことが、国指定を受けることにつながり、だから単

元名も、「わたしたちの首羅山遺跡」なのだと、この遺跡との出会いを設定します。その価値を知った子どもたちは、「すごい」「知りたい」という気持ちになっていきます。

次に、展開の段階です。ここで「ゆたかな体験活動」へと突入していきます。体験活動では、教育委員会と歴史勉強会の方に遺跡の概要を説明していただき、見学に行きます。少しだけ触れることを許してもらった子どもたちは、まさに五感を使って観察します。説明と併せて見学を行うので、その価値を「本当だ!」と実感したり、「もっと知りたい」と追究意欲を高めたりしていました。本物体験でないと出てこない感情です。

終末の段階では、このような体験を重ねた子どもたちが、首羅山遺跡のことをもっと知らせたいという気持ちをもってきます。そこで、発信する場です。平成24年度の3学期には「首羅山サミット」を開催しました。



「首羅山サミット」で発表する子どもたち

伝える場を通して、自分たちが守りたい、受け継ぎたいという気持ちが高まっていくのです。

地域・行政を巻き込み
さまざまな活動へ発展

ここで、活動の多様性について紹介します。平成20年の活動開始以来、首羅山遺跡を描いた壁画の作成、遺跡の瓦の拓本作成、子どもたちの発案による清掃活動、「首羅山遺跡マップ」の作成、そして平成24年から活動をはじめた山田小学校では、発信の方法の1つとして久山歴史百科事典「ヒサペディア」を作成、毎年更新するなど、さまざまな活動を行ってきました。

平成25年3月、首羅山遺跡が念願だった国指定文化財になりました。10月には「首羅山遺跡国指定記念イベント」を開催。その中で、子どもたちによるパネルディスカッションを行いました。町民2,000名以上が参加し、盛大なものになりました。

毎年新しい活動を生み出すこの首羅山遺跡は、学習素材としての底をまだ見せておらず、大変魅力的な教材です。町民や子どもたちが、この学習を介してつながっていることも事実です。私もこの地で勤める限り、関わって、巻き込まれていきたいと思っています。(拍手)

Case.3

各教科等で生きてはたらく読解力を活用し、探究し続ける子どもの育成

* * *

京都府 京都市立御所南小学校
研究主任 保科 一生 / 探究力部長 藤川 幸子



これからの社会に求められる「読解力」を育てている京都市立御所南小学校。日常の授業から総合的な学習の時間におけるフィールドワークまで、子どもたちが考えを深めていく姿に、学びの新しいあり方が見えてきます。

子どもたちで話し合い 主体的に授業を行う

【保科】 本校で日常的に進められている授業の様子です（下写真）。子どもたちが司会役として授業を進めています。ここでは、教師は学習課題やめあてを工夫して提示し、学習の本質に迫る出場意識するようにしています。



授業で司会をする子どもたち

1時間の授業では、学習のプロセスを意識しています。まず課題やテキストに対する自分の考えや解釈をまとめる「ひとり学び」を設定。自らの考え方や解をつくるからこそ、伝えたい思いが生まれ、次の交流につながります。次に「グループ交流」です。ペアや4人組で話し合いを繰り返すことは、子どもたちの考えを表出するだけにとどまらず、思考を巡らすよい機会となっています。最後に、全体

交流に移り、学習課題に対する解をまとめていきます。

その中で、教師の役割は、各教科等で付けなければいけない力の定着を図ることと、より質の高い話し合いになるように助言したり、子どもたちの考えを意味付けたり、知識を整理してまとめたりすることだと考えています。

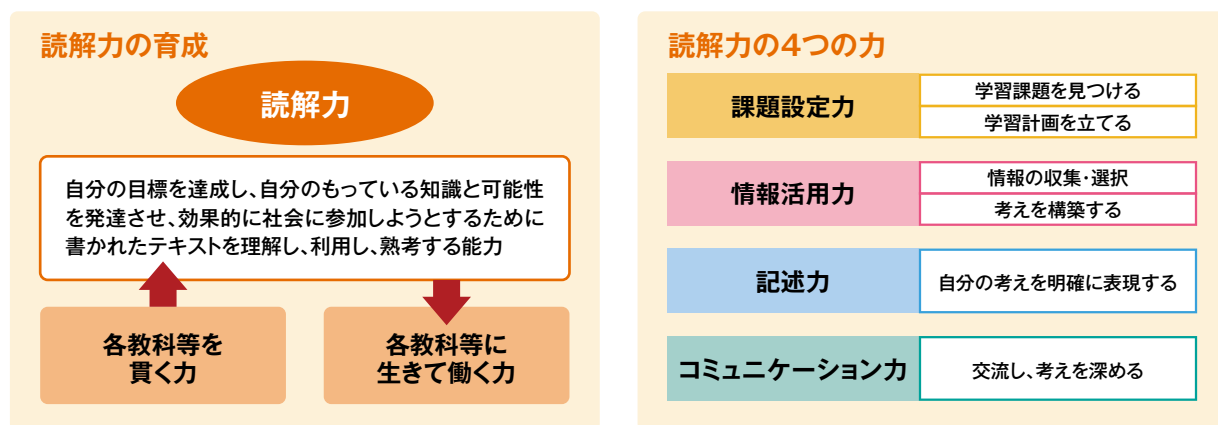
これからの社会に求められる能力は、自ら新しい知識を創り出し、それを使いこなす力だと考えます。与えられた知識を受動的に捉えるのではなく、子どもたちが主体的に学習を進めることで培われていくものです。だからこそ話し合いを通して一人ひとりが考えを深めていく学習のプロセスを意識した単元を構築するようにしています。

各教科・領域を貫く「読解力」を育む

続いて読解力の育成です。ここでは、PISA 型読解力のことで、「自分の目標を達成し、自分のもっている知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能

力」のことです。この読解力は各教科・領域を貫く力であり、各教科等に生きて働く力のことです。本校では読解力を4つの力から高めていけると考え、学習のプロセスの中で、課題設定力、情報活用力、記述力、コミュニケーション力の4つの力を互に関連付け、総合的に高めていける取り組みを、各教科・領域で展開するようにしています。

では、「読解科」の授業の一端を紹介します。1年生の「かんばんっておもしろい」です。教師が地域にある看板（内容や表現の工夫が示された看板）を見つけ、教材としています。子どもたちは看板の特徴から読み取ったことを比較分類する過程で、友達と交流し、思考を巡らせていくわけです。次に5年生の「なるほど! ザ・課題作り」です。これは、各教科の学習において、何が課題で、自分たちが何を学んでいかなければいけないのかといった、価値のある課題を設定する力をつけていきたいという思いで取り組んでいます。例えば、課題を幾つか提示し、よい課題と、あまりよくない課題に分ける中で、課題づくりのポイントに気づき、学習課題の立て方について学んでいきます。これにより、学習に対して課題を立て、進めていく意欲が生まれています。



総合的な学習の時間で 探究し続ける子どもを育成

【藤川】「探究し続ける子どもの育成」を目指す、総合的な学習の時間の事例をご紹介します。

4年生は、本校校区、京都の町中を流れる鴨川をテーマに、学習を進めています。子どもたちが川の中に入っている様子です（下写真）。



身近な鴨川の魅力に触れる

水辺の生き物や魚をつかまえたり、水の流れの気持ち良さを感じたり、子どもたちはすっかり鴨川に夢中になりました。後日、川を岸から感じる体験では、飛び石を渡ったり、木登りや虫取りをしたり、風や木漏れ日を感じたりしました。今日は川の中から、別の日には川の岸から鴨川を感じよう、というように、目的を明らかにしたことで、子どもたちは体験と体験を比較して考え、鴨川の魅力に気づき、もう一度行ってみたい、確かめてみたいという意欲を高めたようでした。

次の課題へ進むために、鴨川の昔と今の写真を見比べてみました。その違いに、子どもたちはさまざまな疑

問をもち、「鴨川ってどんな川なのだろう」という課題を立て、さらに探っていくことになりました。「整備」「人」「観光」「生き物」などを視点に、さまざまな専門家の話を聞き、この体験から、「気持ちがいい」「楽しい」など主観的に捉えていた鴨川を客観的に捉え直し、自分たちだけでなく、京都の人から愛されていることを認識したようでした。ここまでが単元の前半です。

単元の終わりには、京都府河川課の方に、よりよい鴨川について考えたことを子どもたちが提案しました。なぜこのようなゴールの姿になったのか。鴨川について話を聞いた中に、日本野鳥の会の中村さんがいました。そのとき、「鴨川はいろいろな人が守ってきたすばらしい川です。でも、人間が手を入れ過ぎると、生き物にとってはよくないこともあるのです。みんなにとってよい鴨川になるように一緒に考えてほしい」と、投げかけられました。そこで子どもたちは盛り上がり、新たに学習が動き出しました。

第1回目の「鴨川子ども会議」では、「鴨川の魅力を伝える鴨川魅力館をつくろう」「鴨川の魅力を食べて味わう鴨川レストランをつくろう」などさまざまな意見が出ました。中村さんはここでひと言、「鴨川にとって本当に必要かどうか考えてください。人間のためだけになっていませんか。本

来の鴨川のよさをもっと見てきてほしいな」。このアドバイスから、子どもたちは自分たちの提案を見直し、調査をすることにしました。現地でアンケートをとったり、水質調査をしたり、ゴミ調べをしたり、新聞記事を集めたり、専門家を尋ねたり、また会議をしてと。

その結果、子どもたちは提案に自信をもつようになり、自分たちの考えを知ってほしいという気持ちが高揚。そして京都府河川課の方へ提案…となったのです。

探究的な学びが充実するためには、学習が進むにつれ、学習課題が高まり、考えがより良いものになっていくことが大切です。鴨川の単元のよう、本校では、単元の前半を「考えをつくる」、後半を「考えを練り上げる」と捉えて構想することになっています。

6年間を通して、子どもたちは人や社会、自然とかかわり、大きな感動や深い愛にふれながら探究していきます。自分自身と語り合い、思いや考えを創っていきます。さらに、友達や教師、地域の人と交流し、考えをよりよいものにしていきます。その中で得た、達成感や充実感は自信に変わり、次への意欲につながっていくと考えています。これから出会うさまざまな課題に対し、学んできたことを体験として活かし、考えを創り、学び続ける子どもであってほしいと願っています。（拍手）

Case.4

ひまわりを核に、 地域で生きていく力を

* * *

秋田県 釈迦内サンフラワープロジェクト実行委員会
副実行委員長(釈迦内小学校 校長) 三浦 栄一



ひまわりの栽培・収穫から、ひまわり油の商品化・販売まで、子どもたちを中心に地域ぐるみで行っている釈迦内サンフラワープロジェクト。独自の「ふるさとキャリア教育」が地域の未来を担う“人財”を育てています。

地域が一体となった ひまわり油づくり

釈迦内小学校の開校時(明治7年)の校名は向陽学校。当時県議会初代議員であった日景弁吉氏が、「向陽」、ひまわりのように逞しく成長してほしいという願いを込めて、村の子どもたちのために私財を投げ打って創設しました。以来、釈迦内地区では「向陽」、ひまわりにちなむ名前が古くから大切にされてきました。

この活動がはじまったのは、平成22年、釈迦内小学校4年生が取り組んだ「元気いっぱい『ひまわり油づくり』大作戦」。畑でひまわりを育て、その種を油に加工し、ふるさとキャリア教育として取り組んだ活動は、地域の大人の心を揺さぶりました。私たち大人にもできることはないだろうか。

では、ひまわりをどう活かすのか。当初、釈迦内 SP(サンフラワープロジェクト)では何度も会議を重ね、ついにある答えにたどり着きます。子どもたちの活動を、ただ単に手伝うのではなく、自分たちが主体としてかわりながら、まちづくり、地域活性化

をすることが大切なのではないか。釈迦内小学校を核に、ひまわりを中心にした地域活性化のために、さまざまな分野の人が得意なことを持ち寄って、手を携え、一丸となって行う仕組み。できることを模索し、できるときに行う、柔軟で、長続きする仕組みこそ求められたのです。ひまわり油の販売で、釈迦内 SP ではひまわりを使った6次産業化により循環のシステムを生み出しました。ひまわりの栽培、収穫、商品化、販売という6次産業化、そこで得た利益を子どもたちの教育活動に充当する仕組みをつくり上げました。

地域で発揮できる 社会人としての力を

大館市は全国で最も少子高齢化率の高い秋田県の中でもその先進地。地場産業の衰退とあいまって、半世紀後には地域社会が崩壊しかねないと言われています。このことをどうしたらいいのか。滅亡への一本道から脱する未来戦略こそ「ふるさとキャリア教育」です。アイデンティティとなるべきふるさと基盤上に、それぞ

れの人生の指針を描く。「ふるさと教育」と「キャリア教育」の理念の融合が必要となったのです。大館市ではふるさとキャリア教育は義務教育だけでは完結しないと考え、0～20歳の縦の一貫と、学校と実社会との連帯を構築し、すべての学校、園が取り組んでいます。コンセプトは「大館盆地全体を教室に。市民一人ひとりを先生に」です。地域を支え、地域で力を発揮できる社会人基礎力と、社会人実践力、これこそふるさとキャリア教育の目指す学力です。

ひまわり活動が 育む様々な力

ひまわり活動が育む力は何なのか。この活動は、休耕地を借りて行います。子どもたちが所有者に会って、趣旨を説明します。これは他人への「働きかけ力」につながるからです。そして活動のスタート。畑を耕し、ものを育てる土台となる「土づくり」を学びます。種をまく中で、自然と対峙し自然を活かしてきた「先人たちの知恵」を学びます。芽が出て、やがて葉が出て、「自然の営みの原点」を学びます。芽はカラスやスズメなどに食べられてしまいます。シートをかぶせたり、芽出した苗で植えたり、「課題発見力」「計画力」が育ちます。種まきや除草はみんなで行う

何のため？誰のための活動？(コンセプト)

事業コンセプト

ALL FOR CHILDREN

～すべては未来を担う子どもたちのために～

地域の未来

太陽に向かって咲き誇る「ひまわり」は、地域住民の新たな決意の象徴となる。

自分たちが主体としてかわかり、まちづくりをすること

「ふるさととキャリア教育」って何？(ストラテジー)

一本道から脱する未来戦略

ふるさと教育

ふるさとへの
愛着

キャリア教育

夢や目標
勤労・職業観

ふるさととキャリア教育

ふるさとに生きる基盤を培う「ふるさと教育」と、その基盤の上に自らの人生の指針を描く「キャリア教育」を融合

ため、「チームで働く力」「状況把握力」が身につきます。その中で、相手への「傾聴力」、よりよいやり方を考え合う「柔軟力」が育ちます。花が咲くのを待ちわび、「時間」を学びます。そして満開。子どもも大人も成果と喜びを共有します。



流した汗は最高に美しい！

収穫も一苦労。大きなひまわりを抱えて運びます。その数や膨大。目標を設定し、行動する「実行力」が育ちます。どこにどう運ばばいいかという「順序、規律性」が育ちます。種取りでは、朝の学習前、中休み、昼休み、放課後、自分から取り組む「主体性」が生命線です。乾燥、出荷を通し、種が油になる製造過程を学びます。その後、委託業者からひまわり油が完成してきます。自分たちのがんばりが誇りになる瞬間です。



完成したひまわり油

販売活動がはじまります。まずはびんに貼るラベルづくり。キャッチコピーを真剣に考えます。新しい価値を生み出す「創造力」が高まります。そして販売。声の出し方、ジェスチャー、PRの試食。自分の考えをわかりやすく伝える「発信力」が求められます。セールストークには、現状を分析し、目的や課題を明らかにする「課題発見力」が必要になります。製品のよさを焦点化した知識、他者を意識した「表現力」が求められます。そしてラベルのキャッチコピーもセールストークも、実は「表現語彙力」が試されているのです。

販売活動が一段落したところで、収穫感謝祭。一緒に活動し、お世話になった地域の方、企業の方を招いて、6年生がひまわり活動のプレゼンテーション。そして全校児童が手づくりした感謝状を一人ひとりに手渡し、だまこ鍋をつくって振る舞います。「顔の見えるおつきあい」は、ぬくもりの中で豊穡の時を迎えます。

地域と子どもたちの未来への羅針盤

釈迦内SPの活動がつくり上げているものは、地域住民と子どもの生きがいや達成感、地域経済への効果、ふるさとキャリア教育での人財育成、企業のイメージアップや社会貢献です。これ

らが相乗的、波状的に広がりをみせ、未来へ向かう羅針盤となっています。

子どもは、挨拶がよくなり、地域行事やボランティア活動にも進んで参加しています。公の場においても爽やかな振る舞いや、自己表現ができます。このことは社会や大人への信頼感、社会的役割の自覚、自己有用感、自信がもたらした成長です。子どもたちの凛とした姿に、地域の未来と希望が見えるようになってきたのです。

さて、「ひまわり油の主成分は何ですか？」そう尋ねられたら、私は即座にこう答えます。「ひまわり油の主成分は希望と未来です」。そして釈迦内SPの取り組みは、「釈迦内発 未来行き」の乗車券にもなるのです。この乗車券は諦めない限り有効です。素敵な大人の姿満載の地域活性化。子どもが目指す姿がそこにあります。支援ではなく、大人自らがつくる地域の活性化。子どもと共に、地域みんなで作る豊かな未来への取り組みなのです。そして「顔の見えるおつきあい」を深めながら、子どもたちが次のアクションを起こす土台です。ひまわりがつくるストーリーに完結はありません。始まってまだ4年の実践が、25年後、半世紀後の未来のふるさと釈迦内への光となるように。「ALL FOR CHILDREN」、すべては未来を担う子どもたちのために。(拍手)

Keynote

賢い子どもたちを育む

～実感する場づくりへ～

* * *

慶應義塾大学 教授 鹿毛 雅治

■プロフィール

2005 年より慶應義塾大学教職課程センター教授。著書に「学習意欲の理論：動機づけの教育心理学」（金子書房）、「子どもの姿に学ぶ教師—学ぶ意欲と教育的瞬間」（教育出版）など。



人、物、事との出会いやかかわりを通して、全人的に発揮される——それが「賢さ」です。賢さを育むには頭と心と体が活性化する「実感する場づくり」が大切。このような場を具体的に実現させているのが、前述の4つの事例発表です。

答え合わせから 問題発見・解決・評価へ

われわれの頭の働かせ方は、「三権分立」のように3つの思考の型があると、心理学者のスターンバーグは言っています（図表①）。

では、広く教育の文脈ではどうか。私自身の学校生活を振り返っても、すでにできあがっているルールや公式を、どのように効率的に処理してテストの点数につなげていくかが評価されます。行政的な順守型の思考が重視されています。これは非常に偏っているのではないかと。立案型や評価型の思考がおろそかになっているのではないかとこのことを指摘したいと思います。

わかりやすいように、この3つの働きを「フル知性」と名づけました。知性は、答えが合っているかどうか量的に評価されます（行政的思考）。しかし、知性とはそれだけではありません。問題を発見し、解決するために考え（立法府的思考）、そして根拠に基づ

いて判断します（司法府的思考）。フル知性がバランスよく働くということを、スターンバーグは非常に強調しているわけです。

さて、そこで、「賢い子どもたちを育む」といったときに、フル知性の話は、どちらかというと頭脳の働きに着目しました。しかし、賢さとは頭脳の働きだけなのでしょうか。4つの事例発表からもわかるように、人、物、事との出会いやかかわりを通して、全的に発揮されるということが確認できたと思います。たとえばコミュニケーション。表情やゼスチュアなど非言語的なものも含めて、われわれは高度なコミュニケーション能力を持っています。その背後には、ワクワク感や充実感といった、われわれの意欲を支えるような情動というものがあるわけです。情動とか感情とか意欲などが実は頭脳の働きをサポートしていると考え、賢さは頭脳だけではなく、全人的な特徴として捉えるべきものなのということがわかるのではないのでしょうか。

パフォーマンスの 質が上がる

動機づけの心理学では「いま、ここ」における心理的な没頭状態を「エンゲージメント」ということばで表します。たとえば時を忘れてミステリーを読む。スポーツや仕事をしている時もそうです。

エンゲージメント状態というのは、まず行動的な側面として、一生懸命取り組むとか、試行するというような状態であるのに対して、非エンゲージメント状態というのはその対極で、諦める、落ち着きがないなどの状態です。感情的な側面を比較しますと、エンゲージメント状態というのは、情熱的、興味を示している。それに対して非エンゲージメント状態というのは、退屈、不満げという状態です。もう1つ、認知的な側面を見ますと、エンゲージメント状態というのは、目的を自覚している、目標実現へ努力している。それに対して非エンゲージメント状態というのは、無目的、無関心などの状態です（図表②）。

ここで重要なのは、エンゲージメント状態というのは意欲的に学ぶ姿であると同時に、知・

頭の働かせ方のスタイル 図表①



参考文献: スターンバーグ「思考スタイル」新曜社

情・意が一体化しているということです。頭脳だけでなく、感情、行動、あるいは意欲的な側面が一体化している状態だということがわかります。さらに重要なのは、エンゲージメント状態であれば、われわれのパフォーマンスの質が上がるということです。生き活きと活動し、充実感や達成感を感じ、学ぶこと、生きていくこと、あるいは人とかわることにさらに意欲的に取り組んでいく、というようなうれしい姿が見られるのではないかと思います。

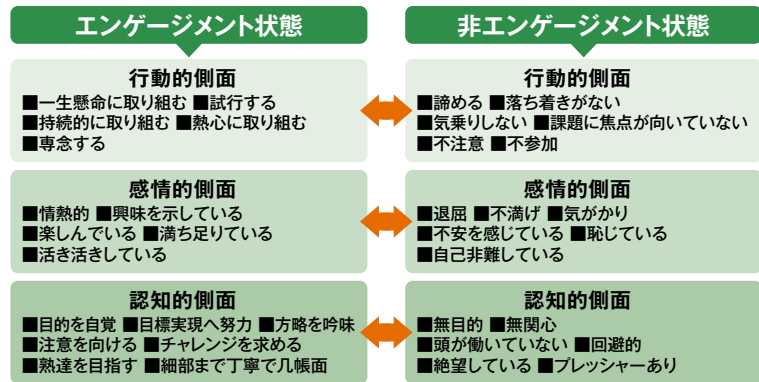
エンゲージメント状態になるような場をどのようにつくり出すかが、われわれが生きている上で、とりわけ教育を考える上では非常に重要。4つの事例発表は、そういう具体的な例を紹介していただいたと思いますが、まさにフル知性が働くのと同時に、五感が活用されることが非常に重要だとわかりました。

振り返って 次を見通す習慣を

「本物の体験」ということばが発表の中にありました。多くの場合、学校での勉強は疑似体験です。本物の体験は、学校から環境

エンゲージメント 「いま、ここ」での心理的没頭

図表②



に出て、その中で、人、物、あるいは文化、歴史とかかわり、学びの充実感を子どもたちが体験していくことだと思います。では、「体験を学びにする」とはどういうことなのか。今の世の中、とかく学校教育は白か黒か答えを決めたがります。むしろ大事なのは、判断を留保して、「待てよ」と考えてみる。振り返って、次を見通すことです。そういう習慣や心がけが「体験から学び」への重要なポイントになります。

振り返って見通すということを考える上では、エンゲージメント状態がある体験かどうかということが問われているわけです。「振り返りたい」「次を見通したい」という「意図」が非常に重要で、その瞬間、「じゃ振り返るんだぞ」「次はどうなるかな」というような、質の高い「意図」を感じながら振り返ることが必要です。そのことの背後では、意義を実感することです。振り返る中で、「ああ、やってよかった」というような質の高いポジティブ感情がかかわる体験に随伴する、つまり「伴われる」ということが非常に重要です。それが単発的でないということがさらに重要です。4つの事例

「体験から学び」へのポイント



発表はまさに息の長い活動です。体験が何回も繰り返されることによって、おのずと振り返って見通すというような質の高い習慣や態度が形成されます。そうすると、われわれの仕事というのは、そのような質の高いポジティブ感情を実感できるような「場づくり」をすることなのではないかと思います。

フル知性、さらには五感、コミュニケーション、このようなことを体験する、さらにそれを振り返って、見通していくような学び、それはとりまなおさず頭と心と体が活性化するような、まさに知・情・意が一体化するエンゲージメントをいまここで体験できるような場を共につくっていくこと。それは実感を通して賢さを育むような場ではないかと思います。われわれの課題は、このような場をいかに具体的に実現していくかということではないかと、改めて感じるところでございます。（拍手）

自分づくりに生きる「体験」とは

4つの事例発表と1つの基調講演を受けて、会場はパネルディスカッションへ。登壇者と参加者が一体となって「自分をつくる学び」へアプローチしました。

コーディネーター



● 嶋野 道弘
文教大学教育学部・同大学院教育学研究科 教授

■プロフィール

2005年より文教大学教育学部・同大学院教育学研究科教授に就任。文部科学省初等中等教育局視学官・主任視学官、大学院教育学研究科長などを歴任。主著に『教育の精神と形』（教育報道出版社）、『これからの生活・総合』（共著・東洋館出版）など。

● 嶋野 全国各地で前述の事例のような教育が行われているのですから、日本の未来も期待が持てる、楽しみだと思いました。日本を救うのは、「経済再生」よりもむしろ「教育再生」ではないかと。

● 北浦 学校に行きたくてもなかなか行けなかったり、友だち関係がうまくいかず家に閉じこもっていた子どもたちが学園に集まっています。

生徒たちは朝起きてから夜眠るまでの生活のすべてが「体験」になります。それをわれわれがどう支え、彼らに語りかけていくか。基調講演で鹿毛先生がお話しされた「質の高い習慣」「質の高い態度」に、われわれ自身が今後どう取り組んでいくか感じるものがありました。

私どもの校舎は廃校を利用しているのですが、学校をきれいにしようと、地域の方々に相談にのっていただいたり、サポートを受けたりしながら、生徒と一緒にいろいろなことをやっています。

中学3年生が中心になって取り組んでいるのが廊下や階段の腰板張りです。その腰板に自然塗料のニス塗るのですが、中学2年生の男の子から「先生、ぼくが塗るからニスを用意しておいて」と言わ

れました。

その子は勉強や友だち関係など、うまくいかないところも多くあるのですが、自分から「居場所づくり」に参加してくれた。自分というものを表現してくれた。それができたことを非常にうれしく思っています。

● 嶋野 発表の中で、顔も輪郭もぼやけた絵を描いていた子どもたちが、はっきりと自分をダイナミックに描くようになった。これも「生活そのものが体験」だからですね。

● 安部 私は、みなさんの発表を聞いて共通点がいくつかあると感じました。鹿毛先生にも取り上げていただきましたが、やはり「本物体験」が非常に大きな共通点だったのではないかと感じています。

本物体験を仕組むには、その裏に「本気の大人」「大人の本気」が必要だと思います。どの事例を聞いていても、「これはやはり本気だな」と感じました。

子どもたちは大人の本気を感じ取ります。1年に1度の打ち上げ花火のようなイベントではなく、地道に続けている大人の本気を子どもたちが感じ取ってくれたところに継続した意味もありますし、子どもたちの気持ちの高まりもあると

思います。

もう1つは、どの学校も団体も、何かと戦ってきたのではないかと。自分と打ち勝ち、周りを説得し、環境に打ち勝つというように、何かと戦って勝ち抜いた実践事例だったのではないのでしょうか。

● 竹内 本校が20年を経て大きく変化したのは児童数です。学年3クラスだったのが、いまは6クラスに増えました。

地域を生かした本物の体験はクラスや子どもたちが増えても必要だと感じています。「豊かな体験」と「何度も重ねる体験」を推し進めています。

その1つとして、子どもたちは伝統文化や伝統工芸に携わる方々に弟子入りをさせてもらっています。子どもとはいえ「弟子」ということで本当に真剣な指導を受け、物づくりに6回ほど取り組みます。



パネリスト



● 北浦 茂
西濃学園中学校
校長



● 安部 憲司
久山町立久原小学校
主幹教諭



● 竹内 知史
京都市立御所南小学校
校長



● 日景 賢悟
秋田内サンフラワープロジェクト
実行委員会 実行委員長



● 鹿毛 雅治
慶應義塾大学
教授

彫金の指輪を磨いて、鈍っている銀を光らせる。1回目は「ああ、しんどいものだ」と実感する。1回30分位磨いただけでは光りません。3回、4回連続して磨いていると、「大変だ」「しんどい」だけではなく指がへこんでくる。けれども、キラッと光ってくるのです。そのとき、「あっ!」と子どもたちは喜びに変わる。一生懸命磨くようになります。

そして、最初とは見違えるほどきれいになったときに、「難しいからこそ楽しい」という師匠のことばがボンと自分の中に入ってくる。それを子どもたちは、西陣織など他の伝統工芸を体験している子どもたちにも伝える。すると、他でも同じなのです。相談していたわけではないけれども「難しいからこそ楽しい」ということばが自然に出てくる。体験したことが「表現したい」ことにつながっている。

私は、豊かな体験をすればどの子も絶対に伝えたい気持ちになると信じています。しかし、気持ちを外に出すのが苦手な子どもたちもいる。そこで事例でも紹介の「読解力」が手だてになり、身につけることで表現で

きれば、また次の体験が豊かになると考えています。

● 日景 私は企業経営をする民間の人間です。

秋田内SPの趣旨は「この地域で生きていける人間をどうやってつくるか」。それは秋田県共通の課題でもあります。

「体験」という今日のテーマからすると、1本のひまわりを真ん中に置いて、子どもたちも大人も、普段おつきあいすることの無いいろいろな方と接することが出来ます。人との触れ合いが増えます。

子どもたちは「顔の見えるおつきあい」の中から「目に見えない体験」で自分を成長させている。そういう体験をこれからも続けていきたいと思っています。



● 嶋野 「本物体験とは何だろう」というキーワードが出てきました。「何かと戦ってきた」「大人の本気」というのもすごい。「目に見えない体験で子どもたちは自

分を成長させている」—ここにも大きなポイントがあるような気がします。

鹿毛先生は、みなさんのお話をお聞きになっていかがですか。

● 鹿毛 また深まったという感じです。昨今では体験するということがすごく貧困化して、スマートフォンなどの電子機器からの間接情報や間接体験でわかったつもりになっている。われわれの思考や表現の質が低下しているのではないかと思います。それに対して事例発表には「場の教育力」が共通している。その場に巻き込まれる形で学びや成長が起こっている。

本気の大人がいて、おそらく「願い」を持っている。願いがあるから本気になってその場に巻き込まれる。そういう環境の特質があるのではないかと思います。だからこそ子どもたちが巻き込まれて、その子どもたちに巻き込まれる大人もいたりする。間接情報などによる教育とは質がまったくちがう。ワクワクして、エンゲージメント状態になるわけです。

われわれが問われているのは、おそらく「戦略」だと思います。一見、少しちがう領域のことばの



ように聞こえるかもしれませんが、実は、その場の教育力の背景にどれだけ戦略があるのか。まさに戦っているプロセスで戦略は磨かれているのかもしれない。

●嶋野 事例発表の中で、安部先生は「巻き込まれたい」と話されていましたね。

●安部 「体験活動」と「学習過程」と「指導体制」、この3つがポイントになっていて、そこに好循環があると話しました。本気の大人がつくっている大きな渦がそこにあると思います。おそらくよい渦なんです。この渦に巻き込まれると、子どもたちは成長する。子どもも大人も、もちろん私も、渦に積極的に巻き込まれていこうという感じですね。



●嶋野 巻き込まれるとおぼれるというイメージが私にはありますが、そんなことではない。巻き込まれることで、大人や子どもの本気が出てくるといえることですね。

振り返りの活動は心が動いてこそ

●嶋野 体験というと、本物体験、地道な体験、長続きする体験、息の長い体験など、いろいろな修飾語がつくと思います。それでは会場みなさんにお聞きします。YESかNOか。

Q. 自分はこれまでに、たくさんの体験をしてきたという実感がある。

—圧倒的にYESですね。もちろん自己評価ですから、いろいろな観点でちがいがあってと思います。

Q. 「今の自分があるのは、あの体験が影響している」という体験を持っている。

—圧倒的にYES。

この問いを考えているとき、そのような体験があるか、私自身いろいろと考えました。でも、なかなか浮かんでこなかった。だからNOが圧倒的に多いと予測していたのですが、見事に覆されましたね。みなさん幸せですね(笑)。

次は今日のテーマに直接関係します。

Q. 体験から思考、表現、自分づくりをするうえで、大切なものは何だと思いますか。

①「振り返る活動」である。

—圧倒的にYES。

②「思考・表現の技能」である。

—NOが多い。これは違いましたね。

③「感受性」である。

—YESが多い。

④「受け止めてくれる人の存在」である。

—YESが多い。

⑤「その他」。

—これはYESが多いけれど、上げない人も多い。

このデータをどう受け止めましょうか。体験は非常に多い。なにか影響している体験があるという自覚もたくさん持っている。自分づくりにつながる大切なものの傾向も出ていてと思います。

●安部 おそらくスキルではなく、「人」をはじめとした「情意」の部分がみなさんの優先順位になったと思います。「本気」ということばを先ほど使いましたが、測りにくいものが学びにつながるといえる考えなのではないでしょうか。





●嶋野 思考表現の技能的、スキルのなものも大切だけれど、それだけじゃないと。

●竹内 大切さということでは「技能」は1番、2番ではないかもしれません。でも、助けになるものもある。それでYESとNOが分かれたと思います。

●嶋野 豊かな体験をすると、内なるものがたくさん出てくるけれど、それを外に出せない子どもがいる。そのためには、やはり外に出す手だてが必要だと。

●竹内 単に体験しているだけでなく、思考しながら体験することを重ねると、より豊かな体験になるという実感があります。これは大事にしたい。

●鹿毛 私は⑤の「その他」に当たるかもしれません。振り返る活動や技能、感受性などがあげられていますが、個別・具体的に体験を考えたときに、心が動くということは、「関心」や「興味」があるからで、それがないと心

は動かないのではないかと。

「振り返りましょう」とよく言われますが、心が動いているから振り返りたくなる。外から興味を持ってと言われても難しいですし、思考・表現につながりません。自分づくりというのは、まさにその発展としてあるのではないかと思います。

●嶋野 「振り返る」という活動が非常に多いですが、単に振り返る活動を取り入れてもだめで、感受性とか、心が動くとか、それらが絡んでこないといけないということですね。

●北浦 ④「受け止めてくれる人の存在」に、YESのパネルが素早くサッと上がったように見えました。実は私も「受け止めてくれる人」が非常に大事だと思っています。

学園の子どもたちが体験して表現するには、まずはわれわれとの信頼関係です。事例発表での「依存」がしっかり出来上がってきたときに、体験がうまく生きると思います。その裏側にいる「受け止めてくれる人」がとても重要になります。YESのパネルが上がる早さを見て納得しました。

●嶋野 事例発表でコンテイナー、コンテインドとおっしゃって

いました。「受け止める人」の存在と、それに対して「依存」しているという自覚。自立と言うけれど、生きるということは依存して生きていくことだというお話。共感する世界があったわけですね。

●日景 釈迦内の活動では、体験ということばをあまり使わず、「体感学習」と言っています。いろいろな方々と触れ合うこともそうですし、たとえば牛フンをまいて「くさい」と感じる、あるいはひまわりを持つときに「重い」と感じる、そのような体で感じる体感学習を積み重ねることによって、おのずと自信をもって「表現」できる子どもになっているような気がします。

●嶋野 「体感」ということばはよく聞きますが、「体感学習」というのは聞きませんね。また新しいことばが出てきたという感じです。引き続きグループセッションで議論を深めていきたいと思っています。



豊かな体験は ことばを生み出す

心が温かくなるような「本物体験」。そこから生まれる豊かなことば——グループセッションでは「自分づくり」に結びついたたくさんのことばが、参加されたみなさんから集まりました。



「体験から生まれた自分づくりにつながる表現」をグループごとに話し合って書き出し、いくつかのことばについては説明を加えてもらいました。



【あなたの授業には色がない!!】

一発表者 言われたときは何のことかわかりませんでした。今になって思うのは「あなたらしい個性のある授業ではない」ということ。30年も経ってしみじみわかってきました。

●嶋野 年月を経ないと「色」は出てこない。授業は深いですね。

【イカは白くない】

一発表者 先輩の先生が島の小学校に赴任して絵画指導をしました。「イカは白く塗る」と教えると、「先生、イカは白くありません」と子どもたち。島ですから生きたイカを見慣れています。「子どもたちの感性は鋭い。概念的に教えてはだめ」という戒めを先輩からいただきました。

【伝えたいことを、伝えたい人に伝えたい】

一発表者 「公園は地域の宝か」という学習で、公共施設で発表を行いました。子どもたちは新聞を使って発表する予定でしたが、いきなり始めたのは「劇」。担任も聞いていませんでした。「伝えたいことを、伝えたい人に伝えるには、新聞では足りません。相手を見てしっかり発表することが、伝えることにつながります」との子どもたちのことばに、知らないでいた担任もとても感動しました。

●嶋野 ことばの背景にはすごい学びがありますね。

●安部 思考・表現の技能も大切ですが、アウトプットする場、表現する場も大切になります。

●北浦 かしこまった場ではなく、子どもたちの何げない「環境」、その中でのことばが大切だと感じます。そこに真実が表現されている。

●竹内 「安心」も必要だと思います。何でも言えて、受け止めてくれる。そういう「安心」をどうつくるか。

●日景 ひまわりを通じて「何がうれしかった？」と聞いたとき、女の子が「私たちがつくっ

たひまわり油をお客さまが手に取っていただけるだけでうれしい」と表現しました。商売人の私からすると、買ってもらわなければうれしくないのですが（笑）。自分たちが苦労してできた商品をお客さまが持った、大人にはわからないうれしさがあつたはずです。

●鹿毛 「体験から生まれた自分づくりにつながる表現」には、2つ意味があると思います。

1つは、そうしたことばで子どもたちが自分をつくっている。と同時に、われわれ大人も心が動いて自分をつくっている。もう1つは心が動いて温かくなるような、五感を働かせる場があることです。

●北浦 温かい気持ちで接するということは、子どもたちによって私たちが鍛えられているようにも思います。



●嶋野 言っていることの背景まで受け止めてくれる人には安



心感、信頼感を持って子どもたちは話してくれる。

●竹内 子どもたちにはたくさんの大人とかかわってほしいと思います。多様な価値観がある中、生きていく中で、子どもたちはいろいろな生き方を見ながら自分をつくってほしい。

●嶋野 「大切なものは何か」といったときに、多様にある中の大事なものを自分で選び取って、自分たちでその地域に合ったものを使い込んでいく、そういうことなのかなと思いますね。

●北浦 私は、改めて自分自身が純粹になって、誠実に立ち向かうことの大切さを感じました。

●安部 大切なことがたくさんあって、その中から取捨選択していかなければいけない。

●竹内 私も、学びながら一生修行をする、改めてそう考えさせられました。「一生が修行である」という師匠のことばに子どもたちが響いたように。

●日景 冬になると小学校は大変。除雪車で道の横に雪の山ができます。以前は大人が除雪するか、役所をお願いしていました。今では1年生から6年生まで朝早く来て、自然発生的に除

雪しています。係などありません。大人の世界に子どもをどんどん入れてみる。それもいいと思っています。

●嶋野 実社会、実生活とのかかわりを大事にする教育が叫ばれていますが、やはりいいですね。

●鹿毛 今日は非常に心を動かされました。本気の大人たちが集まって、その背後には願いがあある。子どもの可能性を信じている。だから見守れるし、待つこともできる。とはいえそういう志を持ったプロフェッショナルも1人の人間です。めげることも、弱い部分もあります。だからこそお互いが受け止め合い、支え合って志が貫徹する。われわれは「問い」を持っているけれど、「答え」は1つではない。答えがあったら「これをやればいい」で解決します。そんな簡単な問題ではないから、今回のようなフォーラムもある。発表者一人ひとりの意味づけは違うかもしれませんが、大きな方向性は共有されました。あとは一人ひとりが答えを見つける。北浦先生がおっしゃった「誠実に立ち向かう」のことばが心に響いています。それぞれが持ち帰っ

て、誠実に方向性を持って取り組む。その積み重ねではないかと思いました。



●嶋野 締めくくりにメッセージを用意してきました。

「ふしぎ」という疑問 「きれい」という感動 「おやおや」という驚き 「なるほど」という納得 「そうそう」という共感 「こうかもしれない」という想像や推理 「こうしたらどうかな」という創意工夫などを たっぷりと味わう豊かな体験は 新しきことばを生み出す 新しきことばは新しき力なり 新しき力はたくましき命なり

そもそも人間とは、体験をことばに変換し、生み出したことばを生きる力にして自分探しをし、自分づくりをしていく。これを小さいころから積み上げていくことが教育につながると思いました。

本当に感動の一日でした。ありがとうございました。(拍手)

博報財団は次代を担う子どもたちの「豊かな人間性育成」の実現を目指して活動を行っています。

当財団は、株式会社博報堂が教育雑誌の広告取次業として1895年に創業以来、次代を担う児童の育成を重視して教育・文化面において行ってきた数々の支援事業の精神を引き継ぎ、1970年に財団法人博報児童教育振興会として設立されました。以来、次代を担う子どもたちの「豊かな人間性育成」の支援を目的に活動を行っています。
新公益法人制度の施行に伴い、公益財団法人として認定され、2011年4月、博報財団(正式名称:公益財団法人博報児童教育振興会)としてスタートしました。

博報賞 — 教育現場の地道な努力を顕彰し、すぐれた実践の輪を広げます —

博報賞は、児童・生徒に対する日頃の教育現場で尽力されている、学校・団体・教育実践者を顕彰することを通して、児童教育の現場を活性化させることを目的としています。

フォーラム参加者の声をご紹介します

- 不登校は社会が作り出したこと。社会が責任を持ってケアすることの一端を引き受けていることに感動しました。
- やはり本物体験、繰り返しの体験から思考・表現が深まり、自分がつくられていく。そのような戦略を考えていきたいと思います。
- 子どもが教える場・授業をコーディネートする立場にあるという取り組みは刺激的でした。
- 新しい視点、大きなスケール、地域との関係のあり方など目を開かされる事例ばかりです。
- 地域の中に学校があり、地域で子どもを育てている様子がとても素晴らしく理想的です。「誰のために、何のために」をしっかり押さえているからできることだと思いました。
- ここに来ると、自分の思考の狭さを痛感し、広い視点をいただいて、がんばろうという気持ちが湧いてきます。
- 「賢い」ということに対する新たな発見ができた。
- どの実践も素晴らしかった。全国の実践が集まる、このフォーラムは参加するたび喜びがあります。
- 「答え合わせ」をしたがる、「正解」を求める教育だけでは、「生きる力」を育てることはできない。この現状を変える力は「地域」にあるはずだ。
- 何よりも、子どもたちのリアルな姿、細かな表情をともなった発表の数々で、とても説得力、心を動かす力のある発表だったと感じました。
- 地域と学校と行政がしっかりと連携すると、とてもダイナミックな学習を展開できることがわかり、自分たちの実践の参考にしたいと思いました。
- 本物には本気が必要であること、大人の本気について考えさせられた。

編集後記

全国の学校で体験型の活動が行われる中、体験で終わるのではなく、いかにその先へつなげていけるかが重要ではないかとの考えから、今回のテーマ検討は始まりました。

事例発表をお願いした4つの団体は、いずれも体験するだけにとどまらず、それを子どもたちが主体的、自発的に自分のものとして発信していく、伝えていくところまでを考えて活動しています。

「自分をつくる学びに大切なものは何か」という大きなテーマのもと、参加者各々が自らの体験を振り返りながら、「今の自分があるのは、あのことばに出会ったから」という「自分づくりにつながる表現」について話し合いをすると、会場からは数多くのことばがあげられました。

パネリストからは、「誠実に立ち向かうこと」「一生が修行である」「子どもを子ども扱いしないで大人の世界に入れていく」などの発言があり、最後には、「自分をつくる学びに大切なものは何か」の答えは1つではなく、多様にある中から、その地域に合ったものを自分で選び取り、使い込んでいくことではないか、とこれからの教育に対するメッセージも語られました。

熱い思いをもつ方々が集うフォーラムという1つの場において、交流から新しい気づき生まれ、テーマについて深められ、今後の教育活動におけるヒントとなりましたら幸いです。

教育関係者、地域、保護者の方々に「自分をつくる学び」についてお考えいただくためのヒントになればという思いを込めて、このレポートをお届けします。